

土佐郡 布師田村 自然と歴史



気候 布師田地区がある高知市は、太平洋側気候のうち南海型に属し、年間平均気温は約17℃と温暖で、年によっては3000mmを越す降水量を観測する。日照時間は年間2000時間を超え、特に冬季の晴天が多いことが特徴である。

地形 地区は北部の山地と南部の平地に大別され、そのほぼ中央を国分川が南西に貫流する。平地は元来、国分川によって運ばれた土砂が堆積してできた沖積平野であるが、南西部は長宗我部氏以来、拡大していった干拓地である。



植生 北部の山地は元来、シイ・カシ類、アカマツを中心とした雑木林を基本とするが、戦後進められた山の開発に由来する人工林も一部に見られる。金山城跡の斜面に群生する孟宗竹は、かつて食用を目的に植栽されたものである。



▲高知県高知市の位置



▲高知市布師田地区の位置



▲布師田地区の9つの集落

はじめに

南国市と境を接する高知市の東端、高知城から約8kmの場所に布師田は位置する。北部の山沿いと地区の中央部を貫流する川の両岸に人家が集まり、平地の多くには水田が広がっている。

地区には、古代以来の遺跡や神社が散在し、古くから開かれた地であることがわかる。中世に造られた山城の麓には、江戸時代、参勤交代時に藩主が休憩する御殿が置かれ、村は宿場として繁盛したという。明治以後は、国道の整備や鉄道線路の敷設が行われ、戦後になると工業施設の建設、宅地造成等が進んだ。布師田の風景には、時代と共に緩やかに変化してきた村の歴史が反映されている。

そして現在、地区の中央を横断する新たなバイパス道路が開通し、大きな変化のときを迎えようとしている。

本号では、県都に隣接する、ある里分の二千年の歴史を振り返る。

布師田のあけぼの 〈弥生から奈良時代〉

弥生遺跡と布師田古墳群

浦戸湾の北西、国分川沿いの肥沃な地に布師田はある。この地に人々が住み始めたのは古く、遠く弥生時代以来の歴史が知られる。ミトロ遺跡(下附)では、堅穴住居跡や掘立柱建物跡、弥生土器などが出土しており、国領遺跡(小山)からも弥生土器が出土している。

古墳時代から飛鳥白鳳時代にかけての遺跡としては、七世紀前半のものも推定される布師田古墳群(西谷)がある。跡地は現在宅地となっているが、「二号墳」と「三号墳」とあり、「二号墳」には横穴式石室が設けられ、須恵器・鉄器の出土も確認されている。

条里制遺構と郡家比定地

布師田地区には条里制の施行が推定されており、また『土佐国風土記』逸文より、八世紀前半頃には、土佐郡の郡家が布師田付近に所在したことが推定されている。



長岡・土佐両郡の郡境を示す石碑
〔従西土佐郡〕と刻まれている



ミトロ遺跡からの出土物
遺跡は布師田地区から南国市岡豊町の範囲に広がる(写真・高知県立埋蔵文化財センター提供)

布師の里の神々 〈平安時代〉

葛木の神と布師氏

平安中期、醍醐天皇の命により編まれた『延喜式』には土佐国内で二十一の神社が記載されている。布師田地区に鎮座する葛木男神社と葛木咩神社もその中にみえる。平安前期に編まれた『新撰姓氏録』には、「布師臣」は葛城襲津彦命の後裔とあり、布師氏が祖先神として祀った社が「延喜式」に見える葛木男神・咩神社であったと思われる。また「布師田」という地名にも、布師氏がこの地に住したことが関係していると推測されている。(葛木男神・葛木咩神社の神社比定ならびに地名の由来については諸説あり)



『延喜式』巻10
葛木男神社と葛木咩神社の文字がみえる(国宝・東京国立博物館蔵)



葛木咩神社の故地(下附)
現在、祭神は葛木男神社と合祀されており、付近には「カツラキ」のホノギが伝わる



葛木男神社(西谷)
江戸中期、谷桑山が高皇産大明神社を『延喜式』所載の葛木男神社に比定した

長宗我部地検帳にみる布師田の風景

布師田の検地

天正十五年(一五八七)から、長宗我部元親は土佐一國にわたる大規模な土地調査(検地)を実施した。布師田では同十六年に検地が行われ、その台帳(布師田村地検帳)が今に伝わっている。布師田については、慶長二年(一五九七)の古塩田・新塩田地検帳ならびに元禄十年(一六九七)写の大塩田地検帳も残っている。

天正十六年地検帳

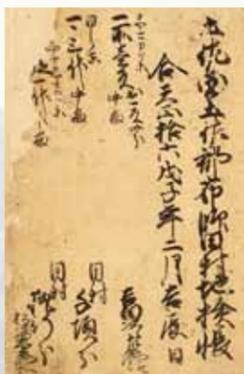
天正十六年(一五八八)の布師田村地検帳によると、田畠屋敷など、検地された面積は百二十二町五反余に及び、その約80%を田地が占めている。畠地・屋敷地はそれぞれ約6%で、水田を中心とした土地利用の様子が知られる。田畠の川成の合計は約4%と少ないが、地検帳全体に川原や川成、川荒などが確認され、国分川沿いの水損状況が推察される。



長宗我部地検帳(重要文化財)
原本の表紙と冊子の姿、土佐一國分368冊が伝わる



古塩田地検帳の冒頭部分
1筆目に塩入アレ、2筆目に塩ハシリの注記が見える



天正16年地検帳の冒頭部分
一筆筆を超える土地が検地されている

土地に対し権利関係を持つ者としては、長宗我部氏の家臣(久武内蔵助・福留半人・国沢将監・桑名丹後・谷忠兵衛ほか)が多く、続いて土佐国一ノ宮の土佐神社関係者(執行・神主・正祝・惣侍・伶人ほか)や、地域の寺院(西山寺・西蓮寺・定林寺・常通寺ほか)などが確認される。長宗我部氏の直轄地(散田)も九十筆を超える。特に、久武内蔵助の給地は多く、百三十筆を超える地が久武の給地として記載されている。久武は西谷の「七ツ城」に土居屋敷を構え、その南面の「西ノ前」に手作地を所持していた。彼が布師田の「代官」だったことも確認される(『秦氏政事記』)。

屋敷は、全部で百六十八カ所が検地され(その内、八十八カ所が居屋敷)、その多くは下附・地蔵堂・西谷付近に所在していた。また、前述の久武内蔵助の土居、同左衛門佐の土居、土佐神社の執行のものと思われる土居など、複数の「土居」も確認され、執行の手作地六ヶ所も記



天正16年地検帳に見えるホノギの多くが現在にまで伝わっており、長宗我部検地の復元研究が可能である
図中の網掛け付近には、古塩田・大塩田のホノギが残っており、400年前の開発を今に伝えている

塩田の地積合計	
古塩田	15町9反13代5步
新塩田	25町6反37代3步
大塩田	12町7反19代
計	54町3反20代2步

古塩田概要	検地地積合計	
	内訳	15町9反13代5步
古塩田	作目	14町6反34代5步
	塩ハシリ	1町 33代1步
	堤分	1反30代4步
	荒	15代

大塩田概要	検地地積合計	
	内訳	12町7反19代
大塩田	毛付	10町1反19代2步
	荒	2町5反49代4步

短期間での塩田開発の背景には、豊臣秀吉による朝鮮出兵と、長宗我部氏のそれへの従軍という政治的動向が関係していたと思われる

里の古刹 〈鎌倉・南北朝・室町時代〉

土佐郷から一宮荘へ

布師田地区は、平安中期から後期には「土佐郷」、鎌倉から室町時代にかけては「一宮荘」と呼ばれた、現在の高知市一宮地区を中心とした地域単位の中に含まれていたと推測されるが、資料を欠き詳細は不明である。

西山寺

江戸後期に編まれた『南略志』には、西山寺(西谷、真言宗)に関する古い記録が引用されており、永徳二年(一三八二)に、本尊聖観音菩薩を納める厨子が制作されたことなど、南北朝室町時代以来の寺の由緒が知られる。



西山寺の本尊聖観音菩薩と同寺の現況
西山寺は、古くは「七ツ城」(西谷)に所在したと伝えられる

布師田の戦国 〈戦国時代〉

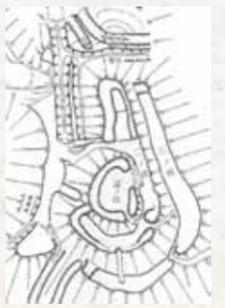
二つの古城跡と石谷氏

布師田地区には、戦国時代の城跡が二つある。金山城跡(西谷)と八頭城跡(地蔵堂)である。ともに城主は細川氏の末流という石谷民部少輔重信で、のち長宗我部氏に降る。現在、金山城跡には詰ノ段・標高二二三・六三・二ノ段・三ノ段・土壘空堀などの遺構が残り、八頭城跡付近には、城堀ノ内・土居などのホノギが伝わる。

布師田の位置

戦国期の布師田を考える上で、長宗我部氏の本拠、岡豊城(南国市岡豊町)との距離感や地理的關係は重要である。江戸中期の軍記物『土佐物語』によれば、石谷民部少輔が長宗我部国親に降った背景として、布師田の南に接する大津城(高知市大津)・下田城(南国市稲生)が国親に落城されたことを挙げており、また安芸国虎が元親の岡豊城を攻めるに際し、大堀・篠原(南国市)方面より布師田の東方に出て、付近に火を放つことなどが記されている。

岡豊城を中心とした戦国期的社会状況の中に布師田も置かれていたことが想像される。



金山城縄張り図
(高知市教育委員会発行「高知市の文化財」1992年より)



金山城跡を南方より望む
国分川を眼下にし、周辺を見渡せる好位置に金山城はあった



金山城跡から岡豊城跡を望む
金山城から東方約2.5kmのところ岡豊城はあった

録されている。「石神大道」「フクキ大道」「ハシノ本大道」など、交通の基幹となる大道が地区内を通っていたことも知られる。

仏神田が多いことも布師田の特徴の一つである。下附の「カツラキ」にある「神テン」は西山寺神事田は正祝分の地で、神主七郎兵衛の給地、西谷の「ウラタ」にある「正月十八日神事テン」は執行の給地で、西山寺の扣地などというように、土地の用途所在地・権利関係が明示されている。その他に「八月三十日ノ御スイテン」「ヒカテン」「念仏テン」なども見える。

塩田の開発

浦戸湾の周辺、海辺部の低湿地帯で、慶長初年に長宗我部氏によって干拓された水田を塩田と呼んでいる当時、塩田は塩浜と表記)。長

宗我部氏が布師田で開発した塩田は、古塩田・新塩田・大塩田の三区分で整理され、検地された地積の合計は五十四町余に及んでいる。天正十六年検地の田地面積の半分以上の広さを、極めて短期間(慶長元年(二年)の内に、開発したことが分かる。

古塩田・新塩田とも、開発された田地は全て長宗我部氏の直轄地(直分)とされ、古塩田ではそこに百姓が作職を所持しており、新塩田ではそこに「布師田衆」が扣地としての権利を所持していた。また、古塩田では四反前後、新塩田では一町前後の田地が多く開発されている。古塩田地検帳には、「塩ハシリ」「スナ入レ」「堤」などが詳しく記され、海水や砂の流入を防ぐため、堤を築きながら、田地を開発していた様子が伺われる。海辺部の低湿地における土地開発の困難さが察せられる。

布師田の塩田開発は、長宗我部氏にとって、家臣団を維持・増強して行くための、また居城である浦戸城周辺の地域開発としての二つの目的を持っていた。塩田開発は、布師田の歴史に大きな足跡を残している。

近現代の布師田

明治〜昭和戦前期

近代布師田の出発

布師田村は、明治二十二年（一八八九）の市制町村制施行を経て、昭和十七年（一九四二）に高知市に編入されるまで、江戸時代の村を引き継いで土佐郡布師田村として存在した。明治二十四年（一八九二）には戸数約三百、人口およそ千三百人を数え、江戸時代中期から大きな変化はみられない。しかし、自由民権期には布師田自由党が結成され、隣の一宮村民とともに減租請願書を太政大臣三条実美へ提出するなど、村人達は確実に近代日本の影響を受けていた。

西谷の変容

村役場は御殿跡に建設され、明治二十四年創設の布師田小学校は当初井流山南の中腹にあったが、明治四十五年（一九二二）に御殿山の麓に移転している。江戸時代、参勤交代の際に藩主が休憩した布師田御殿という「公的」な場所、近代の公的機関が引き継ぐかたちで置かれたのである。小学校は昭和四十五年（一九七〇・七六）の台風被害もあって、昭和五十七年（一九八二）に現在の場所に移転したが、御殿跡には現在も布師田ふれあいセンターと高知市農協布師田支所がある。



高知市農協布師田支所
(旧布師田村役場)



布師田小学校門柱
明治23年(1890)発布の教育勅語中の文言「啓発智能」(右)、「成就徳器」(左)が刻まれている同校が御殿山から現在地に移転した際に門柱も移された



布師田小学校 (明治末〜昭和初期、個人蔵)

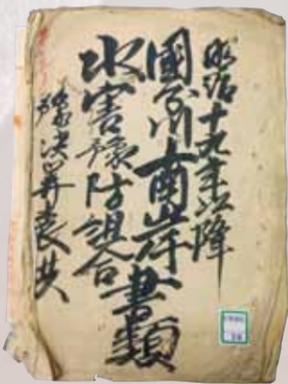
布師田の歴史資料

高知市立市民図書館には、明治から昭和戦前期までの布師田村関係の資料が百三十九点所蔵されている。この資料群は大きく分けて三つの性格に分類できる。一つは戸籍や入籍簿など村役場行政に関する帳簿類(約六十点)、二つ目は国分川水害予防組合に関する文書(約六十点)、三つ目は昭和初期の徴兵検査や簡閲点呼を中心とした兵事関係資料(約二十点)である。また、郷土的視点から布師田を記したものとしては、森澤富寿、森澤栄晴両氏の「布師の里」(一九八二年)や森澤栄晴氏の「嶺の水」(一九九九年)などがある。

国分川との関係

明治二十四年の布師田には百三十六艘の川舟が確認できる。この舟数は、村民の生活が国分川の舟運との密接な関係の上に成り立っていたことを物語っている。

その一方で、時として起こる国分川の氾濫は村に甚大な損害をもたらした。布師田村にとって国分川の治水は重要な課題であった。布師田地区には明治十年代から昭和初期にかけての水害予防組合の資料がのこされているが、それによれば、水害から村を守るために堤防や水門の整備保護が計られている。組合は国分川の「南岸」と「北岸」のそれぞれに設けられ、名寄帳や地租割帳などによって、村人達に負担が割り当てられていた。



国分川南岸水害予防組合書類
(高知市立市民図書館所蔵)

大正期の布師田

大正十年（一九二一）の統計によれば、二百七十七世帯のうち約三分の二が農家、昭和七年（一九三二）頃には、村の面積のうち約半分を田地が占め、九千石の米を生産するなど、大正、昭和になっても農村という布師田村の基本的な生産形態は変わっていない。

大正期の村の出来事としては、大正五年（一九一六）に電灯の供給が開始されたことが注目される。

戦争の時代

近代日本の歴史は、戦争抜きで語ることはできない。「布師田村資料」(高知市立市民図書館所蔵)には、昭和十四年（一九三九）から同十七年（一九四二）の間の、戦没者村葬や徴兵検査に関する帳簿がある。例えば、昭和十五年の村葬関係資料によると、布師田小学校を式場に、無言の帰郷を果たした二名の村葬が行われた。昭和十六年の徴兵検査帳簿には、検査内容や実施に至る手続き文書が綴られ、村民十四名が現役兵として検査に合格したことがわかる。戦中日本の兵役体制とそれに組み込まれた布師田の人びとの姿が具体的に浮かび上がってくる。

日清、日露戦争から敗戦までに出征し戦死した布師田住民は六十二名にのぼる。この戦死者を慰霊するため、昭和三十一年（一九五六）に布師田郷友会によって忠霊塔が建立された。「忠霊塔」の刻書は吉田茂の揮毫である。この塔は御殿山から今も布師田地区を静かに見守っている。



御殿山に建つ忠霊塔

戦後〜現在

新しい集落の誕生と人口増加

昭和五十年代には高知刑務所交通機動隊が相次いで布師田に移転し、職員住宅が造成されたことにより、新たな集落「宮ノ北」が誕生した。江戸時代より千二百〜千三百人と大きな変動をみせなかった布師田の人口は、これを契機に大きく増加し、以来現在まで二千人前後で推移している。

高知市と布師田地区の人口推移

年	高知市	布師田
昭和35年(1960)	196,288	1,309
40年(1965)	217,889	1,299
45年(1970)	240,481	1,229
50年(1975)	280,962	1,362
55年(1980)	300,822	2,015
60年(1985)	312,241	2,278
平成 2年(1990)	317,069	2,161
7年(1995)	321,999	1,989
12年(2000)	330,654	2,151
17年(2005)	333,484	2,249
22年(2010)	343,393	2,214

国勢調査、高知県企画部企画調整課編『高知県の集落』(1990年)をもとに作成

戦後の災害と対策

国分川をめぐる水害は、戦前より繰り返し布師田住民を悩ませてきた。戦後、昭和四十五、四十七年（一九七〇・七二）の豪雨により堤防が決壊し、水防のため西谷・新屋敷の河川改修工事が計画、実施され、それに伴って昭和五十八年（一九八三）までに布師田橋新屋敷橋の架け替えが完了した。また、住民の記憶に深く刻まれた災害として昭和五十一年（一九七六）の台風十七号がある。このときの雨量は、西谷・石測の山の土砂崩れを引き起こすほどで、布師田小学校の校舎裏山も土砂崩れの恐れがあった。そのため、昭和五十七年（一九八二）に小学校は現在の場所に移転した。

近年では平成十年（一九九八）にいわゆる「九八豪雨」が発生、甚大な被害を受けたことから、国分川・舟入川河川激甚災害対策特別緊急事業が採択され、大規模な護岸工事が進められた。

繰り返される水害と、その都度進められてきた河川改修・築堤工事は、地区の安全性を高めたが、その過程で国分川の景勝として永く親しまれてきた五水田の松が姿を消した。



五水田の松(上)と布師田橋(下) <ともに昭和32年、個人蔵>

大きく変わる布師田の風景

戦後の布師田には、交通網の整備や工業化の波が断続的に押し寄せた。大正十四年（一九二五）にはすでに鉄道が布師田を通過していたが、昭和二十七年（一九五二）には国鉄土讃本線布師田駅が開業した。

西部の塩田地帯では、昭和五十九年（一九八四）に高知黒潮博覧会が開催され、その跡地には高知県産業振興センターが設立された。昭和六十年代にかけては高知機械工業団地の稼働が始まるなど、工業振興地帯へと変化している。

さらに、二十一世紀に入るとJRR土讃線高知運転所(車両基地)が高知駅から移設され、平成二十五年（二〇一三）には地区を横断する国道百九十五号線(あけぼの街道)が全区間開通した。布師田の風景は高度経済成長以降の社会の動きのなかで、次々と変貌を遂げている。



高知ばっさんセンター(上)とあけぼの街道遠景(下)

社会福祉と布師田

布師田には戦後社会福祉法人の運営による諸施設が設置された。児童養護施設「愛仁園」は、明治十六年（一八八三）創立の高知育児会を起源とし、昭和三十九年（一九六四）に布師田に開園した。運営母体である高知慈善協会の本部も平成二十一年（二〇〇九）より布師田に置かれている。昭和六十三年（一九八八）には布師田福祉会の「布師田保育園」が開園した。南海福祉会の介護老人福祉施設「グランポヌール」は平成九年（一九九七）に開設し、同十四年には天皇皇后が同所を訪問している。



田園より愛仁園(左奥)と布師田小学校(右)をのぞむ

村の姿

江戸時代の布師田村は、千を超える土佐の村々を代表する大村である。江戸時代中期の『土佐七郡本田新田地払帳(元禄地払帳)』によれば、村高平均二五〇石の土佐国にあつて、布師田村の村高は三二九・二石余、土佐国で第十三位、土佐郡では朝倉村、潮江村に次いで第三位である。潮江村と布師田村を大村たらしめる原因は、長宗我部時代から江戸時代にかけて進展した新田開発である。村高三二九・二石余のうち九〇〇石が新田であり、本田にも長宗我部時代の干拓

新田「古塩田」九〇石が含まれる。元禄元年(二六八八)に免奉行奥村安太夫が布師田の国分川沿岸の新田を調査、四八石余を打ち出したように、浦戸湾に注ぐ国分川沿いで新田開発が進んでいることがわかる。

寛保三年(一七四三)成立の『寛保郷帳』によれば、戸数二六七、人口二一八一人、男六一一、女五六〇)で土佐国で四七位、土佐郡では四位の村である。ちなみに、馬五八匹・牛二八匹がいた。

この布師田村を「大道」が貫通、村内には御殿と送番所が設けられ、藩主を初めとする人々と物資情報が行き交った。

村の役人

村政は庄屋を中心に運営されるが、土佐藩の庄屋は転勤するのが特色である。布師田村では、長宗我部時代から約一八〇年にわたり岡本家が庄屋を勤めていたが、宝暦七年(一七五七)に同家が高岡村に所替になったあと、次々と庄屋が赴任・転勤を繰り返し、固定した家が庄屋役を勤めることはなかった。

『道番庄屋根居』等に見える布師田村の庄屋

任期	人物
天正元(1573)~寛永12(1635)	岡本源右衛門
寛永12(1635)~貞享3(1686)	岡本源右衛門
貞享3(1686)~享保5(1720)	岡本牛右衛門
享保5(1720)~享保8(1723)	岡本牛右衛門
享保8(1723)~宝暦7(1757)	岡本文助
宝暦7(1757)~不詳	島村嘉三右衛門
寛政12(1800)~文政4(1821)	奥田常右衛門
文政4(1821)~天保元(1830)	不詳
文政5(1822)以前	橋詰理作
天保元(1830)~天保7(1836)	武田勇次
天保7(1836)~天保13(1842)	不詳
天保13(1842)~嘉永元(1848)	橋田新左衛門
嘉永元(1848)~嘉永5(1852)	不詳
嘉永5(1852)~安政5(1858)	村山吉十郎
安政5(1858)	村山伝平
安政5(1858)~万延元(1860)	村山五之助
万延元(1860)~慶応3(1867)	竹中藤助
慶応3(1867)~明治4(1871)	不詳
明治4(1871)	前田貫次郎(郷長)

村の信仰

『土佐州郡志』が、寺院は西山寺、神社は式内社である葛木男神社と葛木咩神社など「公的」な神社を中心に記録するのに対し、『南路志』では、これに加えて、伊勢神宮の御師が札を祀った「二万度」や稲作を守る水の神である「神母」など、村人の日常に直結する神々が採録されている。特に神母は国分川沿いの本田三ヶ所所及び、村の神々の中でも特異な位置を占める。

『南路志』(1813年)のみに登場する神仏

神仏	場所
荒神	ノツコ山
若宮	新屋敷
一万度	石淵
一万度	七ツ代
一万度	源右衛門塩田
一万度	喜兵次塩田
神母	30箇所
観音堂	石淵
住吉大明神	別当西山寺
蔵瀧大権現	石淵
地藏堂	下付
地藏堂	地藏

藤並神社への御奉仕

文化三年(一八〇六)に藩が設置した藤並神社は、藩祖豊夫妻と一代藩主忠義を祀った。大明神号を受けた記念として、天保七年(一八三六)には城下で大祭が催されたが、布師田村からは「忠臣蔵夜討装束」に扮した行列が出された。



『藤並神社御奉仕絵巻』より

発掘された荷札

平成二十五年(二〇一三)、県市合築図書館建設地の発掘調査で、「武左衛門」布師田村」と墨書された荷札が発見された。布師田から城下への物資廻送を知らせる興味深い発見である。



追手筋遺跡出土木簡(写真・高知県立埋蔵文化財センター提供)

村の土地

本田には長宗我部時代に開発された干拓新田「古塩田」九〇石七斗七合が含まれ、土佐国西半分の真言宗触頭である常通寺の寺領と上級武士の知行に分けられ、残りは藩の直轄地である。

新田は上士には「役知」として、郷士には「領知」として宛行われ、残りには御貢物地として藩が直轄した。

横山新兵衛と一木市三郎

一木市三郎は一木権兵衛を父とする兄弟であり、葛木男神社には、両名連名の棟札がある。

貞享四年(一六八七)に藩が作成した「覚」によれば、布師田村は、江ノ口村や大津村と並び生産力が高い「上免之村」と位

『土佐七郡本田新田地払帳(元禄地払帳)』(1600年代末)にみる布師田村

都合2292石1斗3升8合
本田1392石1斗4合(内90石7斗7合は古塩田)
100石常通寺領 50石今井左五右衛門知行 30石加藤六兵衛知行 15石横川市兵衛給 32石7斗6合損田引地 1164石3斗9升8合 御蔵知
新田900石2升4合
役知 41石4斗2升6合 横山新兵衛 衣斐寛助 下村市之丞 一木市三郎 領知 66石8斗5升 前田加介 安東小兵衛 横山権八 岡本彦十 国沢藤左衛門 横山六兵衛 御貢物地 791石7斗4升8合(久右衛門支配共)
知行:上士の本田 役知:上士の新田 領知:郷士の土地 御蔵知:藩直轄の本田 御貢物地:藩直轄の新田

置つけられ、年貢率が八〇九割と規定されていた。

石淵の土居家の襖の下張りからは、国分川・布師田川・和食川・物部川の普請や藩主の鹿狩り、あるいは参勤道の整備や参勤通行などに関する人夫料(合計十九匁六分)上納の一覧が発見されたが、村で何が収穫されたのか、村人達の生活はいかなるものであったのか、それを復元できる資料は今のところ見つからない。

道と番所

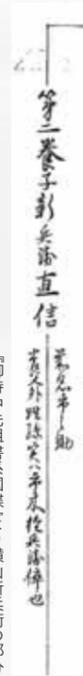
布師田には、城下と土佐東部や北山を結ぶ往還「大道」が通っていた。江戸時代中期に藩が編纂した「元禄大定目」によれば、「大道」の幅は三間と規定されている。番所・御殿情報や物資の送達を担当する送番所が石淵に設置され、藩主休息所として御殿も設けられていた。



『元禄土佐国絵図』(高知市立市民図書館蔵)より布師田の部分

三家の墓 — 一木・横山・岡村 —

野中兼山は布師田村の用水路建設に注目、それを主導した。一木権兵衛を土佐藩士に取り立てた。普請奉行となった権兵衛は、諸処の普請事業を完成させ、延宝七年(一六七九)、安芸郡室津港して果てたと云う。享年六三。跡は息子市三郎が継ぐが、宝永五年(一七〇八)に二木家は断絶した。



一木権兵衛と妻の墓

長宗我部氏に仕えた横山家は、一時浪々の身となるが、横山九郎右衛門が二代藩主忠義に召し抱えられた。九郎右衛門の娘は一木権兵衛に嫁ぎ、継嗣に恵まれなかった。九郎右衛門は権兵衛の息子新兵衛を養子として迎えた。後に断絶する一木家の功績は、横山家により後世に伝えられた。



岡村十兵衛の墓

川と橋

布師田川は、鯉や鮒を特産とする漁業の川であり、材木などを運ぶ舟が行き交う舟運の川でもあった。また、刑罰関係の文書では「布師田川西限禁足」の用語が確認でき、布師田川の流れそのものが、罪人追放の境としての機能をもっていた。

〇堤防の利用

万治元年(一六五八)、松村寛兵衛なる人物が、国分川左岸の堤防七百間の内六〇間に竹を植える申請をしている。これを許可した土佐藩は、いざという時は藩による利用を条件とした。



布師田御殿跡の石垣

結界の村

参勤交代で帰国する藩主の行列は、布師田村で衣裳を整えて、城下へ向かった。

また、六代藩主豊隆の遺骸が江戸から帰ってきた際には、布師田村の川原に小屋を設けて御棺を安置、ここで藩士達は旅装束を改めて、葬列を組んで城下へ入った。豊隆の死を悼んだ家臣斎藤甚五兵衛は、城下に入る前この布師田村で剃髪した。

土佐藩士に召し抱えられた横山九郎右衛門は、散田(荒廃田)二百石を拝領し、「開作役」を仰せつかった。横山家は新田開発に関係する技術を有した家である。九郎右衛門の娘と一木権兵衛との婚姻も「新田開発」に関する技術を縁としたものだと考えられる。九郎右衛門の跡を継いだ新兵衛(権兵衛の息子)は、「新田開発役」を仰せつかり馬廻に昇格した。



岡村十兵衛の墓

地図と写真で見る布師田

交通

- 高知市役所より車で約15分
- JR高知駅よりJR布師田駅まで約10分



参勤交代道

図中の参勤道は「参勤交代北山道 整備活用計画書 10.活用提案 みちを歩くことを楽しむ」(高知県教育委員会、1997年)所収の「高知城から領石へのみち」図を参考にした(参勤道の経路については諸説あり)



1 葛木男神社



2 金山城跡



3 布師田御殿跡



4 一木権兵衛・横山家墓所



5 岡村十兵衛墓所



6 密倉神社



7 郡境の碑(2基のうち東側の碑)



8 葛木咩神社跡



9 地蔵堂

地域記録集 土佐の村々3 高知県高知市布師田地区
土佐郡 布師田村 〈自然と歴史〉
 発行 平成二十七年(二〇一五)三月三十一日
 編集 公益財団法人 土佐山内家宝物資料館
 執筆 差し込み 渡部 淳(館長)
 一・八頁 筒井聡史(企画員)
 二・三頁 横山和弘(企画課長)
 四・五頁 渡部 淳(館長)
 六・七頁 富井 優(学芸員)
 庄屋一覽 片岡 剛(学芸員)
 印刷 有限会社 片岡印刷所



お世話になった人々

【機関・団体】
 高知県立埋蔵文化財センター
 高知市教育委員会
 高知市立市民図書館
 高知市立布師田小学校
 東京国立博物館
 西山寺
 布師田の未来を考える会

【個人】

今井健夫
 江洲幹史
 岡本昭利
 岡本純一
 北村光輝
 北村 擴
 澤田高興
 澤田昌孝
 土居國起
 土居稔昌
 土居利光
 徳弘頼昭
 富田英郎
 永野 功
 西川章史
 西村敏雄
 野々村壽昭
 前田修一
 安岡孝晃
 (敬称略・五十音順)

編集後記

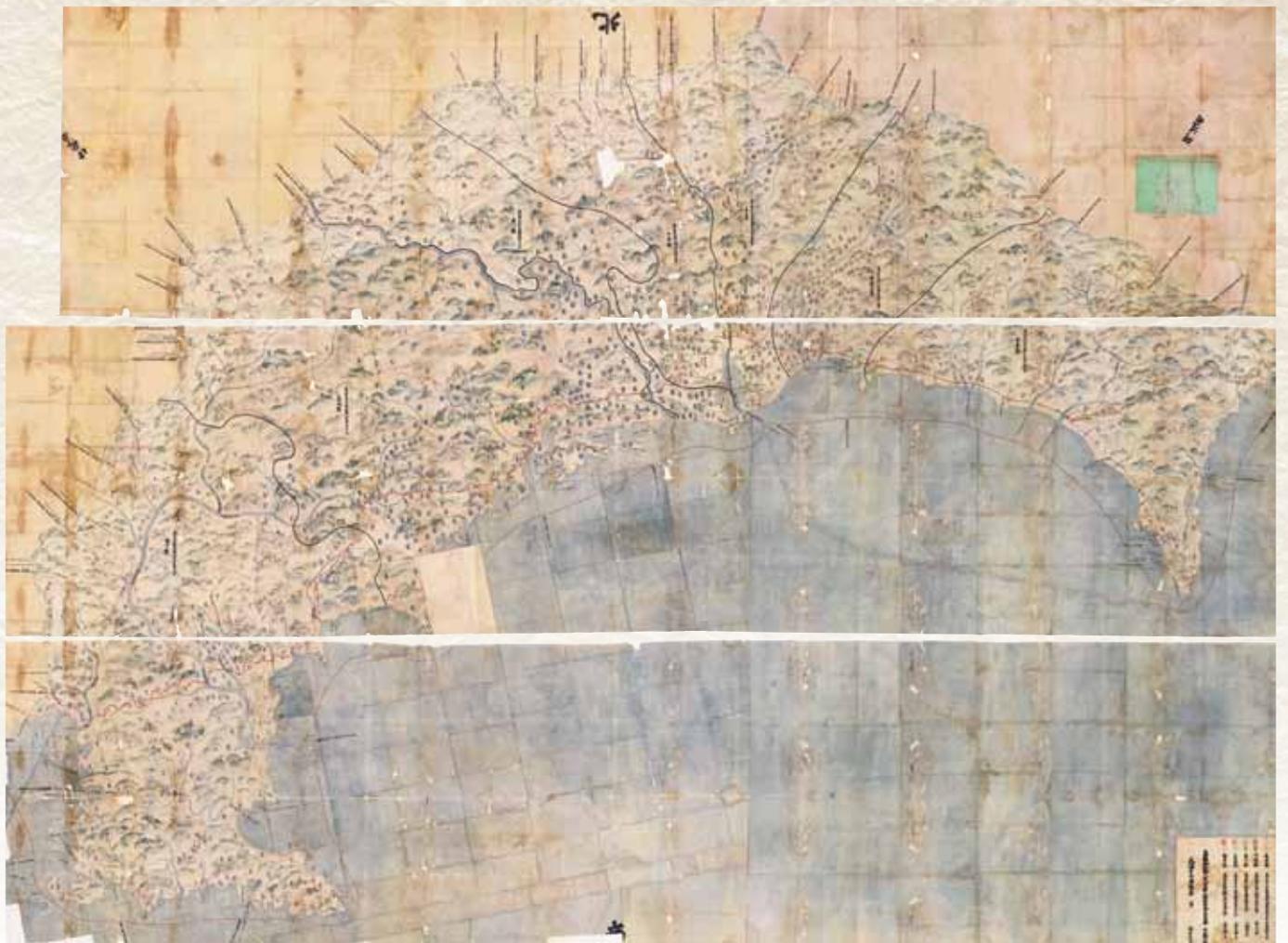
本号を作成し始めてから、地区の自治組織「布師田の未来を考える会」の歴史環境委員会の皆さんには、大変お世話になった。地区の歴史を守り伝える活動に取り組み委員会の人々にお話を聞くため、私たちは足繁く布師田に通った。

記録集の編集を始めるにあたり、委員会から地区の家々へ古い文書や手紙、写真などの情報提供の呼びかけが行われた。その結果、石洲の土居家より、一枚の古い襦が発見された。襦を預かり、私たちが解体調査を行ったところ、下張りから参勤道などに関する人夫料上納の一覧が見つかった。江戸時代の資料があまり残っていない布師田において、貴重な成果となった。

これを契機として、今後さらに資料の発掘や調査が進むことを願って止まない。

(企画員 筒井聡史)





『元禄土佐国絵図』（高知市立市民図書館蔵）560cm×750cm

幕府の命により作成された土佐国絵図の控図。元禄13年(1700)の年紀がある。編紙(余白部分)に記される土佐国の村数は1076ヶ村、石高は268,484石余。これは、長宗我部地検帳以来の本田に、江戸時代に開発された一村立新田(新田のみの村)を加えた石高である。

「地域記録集 土佐の村々」3号 発行にあたって

土佐山内家宝物資料館

「日本人は米を食べ続けてきた」というが、それは正確さに欠ける謂である。飽食の時代といわれ、米離れが進み、むしろ米を如何に消費させるかが問題となつている現在では、およそ考えられない言かも知れないが「日本人は米を食べたい」と思い続けてきたのである。

県域の八割以上を山林が覆い、しかも荒々しい気候の土佐では、それは更に切なる願いであった。良質の米を少しでも安定的に生産するために、平野部では勿論のこと、焼畑を主流とする山分の小さな谷筋でも、営々と新田開発が進められてきた。

そのことは、元親が数ヶ年をかけて実施した検地の結果をみても明らかである。『長宗我部地検帳』には、所謂「土佐二十四万石」の根拠となる数字である田畑併せて二万四千町歩の土地が記録されているが、地検帳三六八冊の内十数冊は新田地検帳であり、この時代の新田開発の進展を証している。近世、それは大開発の時代であった。

特に注目したいのは浦戸湾岸の夥しい新田である。「塩田」と称された干拓新田の多くは、元親が浦戸城に移動してからのものである。天正十六年(一五八八)、居城を岡豊城から大高坂山に移した元親は、わずか三年で浦戸城に移転する。この移転の理由を、長宗我部政権の治水技術の未熟さと考える向きもあるが、浦戸湾岸の干拓新田の数を見るとき、治水技術の問題に結びつけるのは不自然である。天正十九年という年、それは秀吉の朝鮮出兵宣言の年であり、元親の浦戸移転の真の理由は、水軍基地の設置という積極的なものであった。文禄慶長期の臨戦態勢下での新田開発は、兵糧確保の意味を持っていたのであり、つまり、土佐の塩田は海外進出との関係で登場したのである。ちなみに、土佐藩は元親が把握した田畑を本田、山内

氏入国以後の開発地を新田と称した。江戸時代になると、土佐藩は幕府からの度重なる軍役への対応に苦慮することになる。参勤交代と江戸屋敷の維持、將軍や幕閣への献上進上などの恒常経費に加え、江戸城や大坂城の御手伝普請、福島正則改易に伴う広島城請け取りへの出兵など、臨時出費も莫大で、まさに土佐藩は「すりきれ」状態であった。

これを救ったのは山分の材木であったが、有限資源に依存する財政は不安定であり、藩庁の悲願は安定した米の生産と上方への売却体制の確立であった。江戸時代初期の藩政改革を主導した野中兼山の時代、郷土制度の導入などにより大規模な新田開発が進められ、米生産は飛躍的に増大した。洪積台地の開発により全く新しく成立した野市村、干拓新田が村のほとんどを占める潮江村など、大規模な新田村が次々に成立、「里分」は拡大の一途をたどり、土佐藩の石高は江戸時代中期に三十万石、幕末には五十万石にまで増加した。

「土佐は山国」あるいは「海の国土佐」とい、山分と浦分に挟まれた里分の歴史はややもすれば見逃されがちである。しかし、今でも「新田集落」、「本田百姓」、「新田の縄延び」などという言葉を耳にするように、悲願が込められた田畠の歴史は、人々の意識の中に深く刻み込まれているのである。

かかる里分のありようは、近代現代でまた大きく変わりつつある。人口の集中と都市の拡大、食生活の変化と減反政策、産業構造の変化と離農、それらは古代以来営々と拓かれてきた大地に大きな変化と新しい意味をもたらしている。里分には、山分や浦分とはまた異なる現代的課題が突きつけられているのである。

土佐藩における村高上位の村々

土佐藩の村々のうち、石高の上位50ヶ村を表す

	郡名	村名	村高	本田	新田
1	香我美郡	野市村新田	5669.50	—	5669.50
2	高岡郡	高岡村	4647.49	3778.37	869.12
3	土佐郡	朝倉村	3238.42	2938.29	300.13
4	長岡郡	大津村	2965.52	2113.96	851.56
5	土佐郡	潮江村	2901.21	739.40	2161.80
6	長岡郡	大桶村	2742.56	2375.92	366.64
7	香我美郡	山田野地村新田	2728.83	—	2728.83
8	長岡郡	介良村	2564.64	2415.57	149.07
9	安芸郡	一ノ宮村 井ノ口村	2564.39	2102.01	462.38
10	香我美郡	夜須村 手結村	2453.33	1982.05	471.28
11	高岡郡	三野村	2399.14	2296.91	102.24
12	高岡郡	日下村 江尻村	2294.97	1868.17	426.79
13	土佐郡	布師田村	2292.14	1392.10	900.02
14	安芸郡	川北 松田嶋 江川	2253.64	1174.76	1078.88
15	高岡郡	半山本村 大野 窪川 姫野々 他5ヶ村	2249.91	1060.04	1189.87
16	安芸郡	奈和利本村	2242.15	1484.26	757.89
17	吾川郡	長浜村	2172.22	1594.10	578.12
18	吾川郡	弘岡上ノ村	2084.55	1915.38	169.16
19	香我美郡	上田村	2011.27	1832.43	178.84
20	高岡郡	蓮池村	1983.67	1847.14	136.53
21	土佐郡	江ノ口村	1981.04	1440.82	540.22
22	高岡郡	久礼本村 鎌田 大野 北村	1940.31	1232.16	708.15
23	高岡郡	度賀野村	1919.90	1879.22	40.68
24	安芸郡	野根本村 中村 中島 葛原 他6ヶ村	1884.93	1233.68	651.25
25	高岡郡	梶原本村 上成 川口 川井 他4ヶ村	1786.43	734.70	1051.73
26	吾川郡	伊野村	1716.18	1673.73	42.45
27	長岡郡	十市村	1715.49	847.45	868.04
28	安芸郡	田野村	1707.43	679.66	1027.77
29	土佐郡	一宮村	1691.66	902.20	789.46
30	香我美郡	山南村	1691.55	1339.42	352.14
31	吾川郡	弘岡下ノ村	1690.98	1454.93	236.06
32	高岡郡	新居村	1680.59	1060.05	620.54
33	土佐郡	土居 北泉 宮小野 ぬるい 他4ヶ村	1652.46	573.84	1078.62
34	香我美郡	王子村	1591.95	1404.42	187.53
35	吾川郡	東諸木村	1586.35	1456.05	130.25
36	幡多郡	宿茂村	1569.87	1331.59	238.28
37	高岡郡	多之郷村	1567.92	890.67	677.26
38	高岡郡	越知面村 長野村	1550.39	321.06	829.32
39	香我美郡	下田村 前之浜村	1520.11	1442.61	77.50
40	安芸郡	羽根 尾僧	1490.84	904.03	586.81
41	安芸郡	佐貴浜本村 居木 尾崎	1469.91	990.20	479.71
42	吾川郡	弘岡中ノ村	1460.03	1400.56	59.48
43	長岡郡	五台山村	1424.95	46.03	1378.92
44	高岡郡	上ノ加江 笹葉 押岡 小草	1416.27	972.04	444.24
45	香我美郡	山北村	1410.74	1120.28	290.46
46	高岡郡	波介村	1409.78	1293.65	116.14
47	安芸郡	和食本村	1406.63	982.38	424.25
48	安芸郡	津呂本村 三津 椎名	1345.42	536.32	809.10
49	高岡郡	下分村	1337.00	895.32	441.68
50	土佐郡	江ノ口村 比島村新田	1334.16	—	1334.16

上記表は「土佐七郡本田新田地払帳(元禄地払帳)」(17世紀末)の石高表記による
(松本瑛子編集・発行「本田新田地払帳」1980年を参考に作成)



『元禄土佐国絵図』(高知市立市民図書館蔵)より、香我美郡・長岡郡・土佐郡の平野部